

ダンス授業の機能に関する研究

天理大学 塚本 順子

I. はじめに

ダンス授業は、ダンスを創造したりそれを発表し鑑賞したりする中で自己と他者がかかわり、お互いを認め合える有機的な場であると言える。しかし、明確なルールや数値で、目標や達成した結果や成果を明らかにすることもできるスポーツとは異なり、人間教育における多様な広がりをもつ特性から、指導者がそれらを客観的かつ具体的に把握しにくいという面もある。「ダンスの授業として満足のいくものであった。」「ダンスが好きになった。」一言で<良い授業>と言っても、その中には実に様々な要素（因子）が含まれている。

そこで、本研究ではダンス授業がどのように機能しているかを把握する為に、学生自身が授業受講後に評価した各項目がどのように関連しあい、また、どのような要素が反映されているのかを明らかにすることで、ダンス授業の機能・構造を実証的に捉えることを試みた。

II. 方法

1. 対象

「スポーツ方法（ダンス）」A/Bの受講生55名（男子2名・女子53名）

2. 授業目標

ダンス学習の目標・内容についての基本となるものは学習指導要領に示されている「自己の能力に応じ、感じを込めて踊ったり、みんなで楽しく踊ったりして交流し、発表すること」や「互いのよさを認め合い」あるいは「自己の能力に応じた課題の解決」や「練習の仕方や発表の仕方を工夫し」「発表交流会の企画や運営ができるようにする。」などを念頭におきつつも、一人一人の人間としての多様な広がりを目指した創造的芸術経験としての活動として位置づけた。また、中学及び高等学校の保健体育教員養成という視点からも、受講学生が受け身ではなく主体的に活動を展開することも目標とした。

3. 評価項目の選定および調査実施

評価項目の選定にあたっては、先行研究で得られた受講学生の記述と松本の研究を勘案して作成した。さらに、指導者の行動、学生による取組みの自己評価等の項目を加え26項目となった。回答は、「4. 非常に思う」「3. 思う」「2. あまり思わない」「1. 全く思わない」の4段階の順序尺度で評価させた。

また、調査の実施は授業最終日の終了時に無記名により回答させた。

III. 結果および考察

本研究では、ダンス授業を受講した後の26の評価項目について因子分析をおこない共通因子を抽出した。

その結果、以下のように固有値1.0以上の因子が6因子抽出された。

第1因子には「E.ダンスをすることで以前より身体が疲れなくなった」「F.自分のからだの動きの可能性が広がった」「G.からだを使って動くことで以前より自分のからだを敏感に感じられるようになった」「J.ダンスによってイメージが豊かになり、自分の表現の幅が広がった」「K.他の人とは違った自分らしい個性を発見できた」「L.伝えたいことを動きにするにはどのように自分のからだを動かせばよいかわかった」等の6項目が0.60以上の高い因子負荷量を示した。これらの項目は自分自身がダンスの授業を受講したことで獲得できたと認識したものであり、第1因子は<ダンスと自己>を表すと見える。

第2因子は「V.先生の授業への熱意が感じられた」「W.授業での指導は丁寧になされていた」「X.先生のアドバイスによって作品作りがスムーズに進むきっかけになった」「Y.授業は満足できるものだった」等の4因子が0.60以上の高い因子負荷量を示した。この結果から第2因子は<教師の指導行動>を示すと解釈できる。

第3因子には「Q.人に伝えること・表現することはすばらしいと思うようになった」「R.他の人と協力して、積極的に取り組むことが大切だとわかった」「S.他の人の表現を受け止めることが大切だとわかった」等の3項目が0.70以上の高い因子負荷量を示した。ダンスにおける他者との関係を示すものであり、<表現・伝達>というダンスにおけるコアであると解釈できる。

第4因子は「M.一人でまたはグループで作品を作り創造する楽しさが味わえた」「N.他の人と共に楽しむことでコミュニケーションが深まった」「P.お互いに表現し合うには良い場の雰囲気作りが大切だとわかった」等の3項目が0.60以上の高い因子負荷量を示した。この結果から、第4因子は他者との<コミュニケーション>を表すと解釈できる。

第5因子には「Z.授業には前向きに取り組めた」「D.ダンスを踊り終えた後は爽快感を感じた」「A.踊ることに恥ずかしいという気持ちが無くなった」等が0.40程度以上の因子負荷量を示した。これは<ダンスへの態度>といえる。

第6因子は「I.動きはいろいろな表現につながっていくことがわかった」等が0.60以上の高い因子負荷量を示した。これは<動きの意味>を表す因子であると解釈できる。